

新古今和歌集 二冊

西澤 美仁

本書は本学常磐松文庫所蔵本である。室町時代写本、斐紙列帖装。原装のままと思われ虫損も殆どなく保存は良好であるが、綴じ糸の弛みや切れの爲、後述の如く一枚紛失しているのが誠に惜しまれる。

縦二・五センチ、横一七・〇センチ。表紙は沈んだ黄色地に紺や薄青色があしらわれた緞子（唐物か）で、格子に花菱、雲形紋、唐獅子（かと思われるが或は龍か）、唐菊、卍、如意宝珠などが織り出されている。見返しは金地に銀が散らされる。題簽、外題、内題はない。

上冊七折、下冊八折で、上冊第一折は十一枚あるが第一葉は表紙と見返しとの間に組み込まれている。第二葉は遊紙で、左上に伏見殿邦高親王御筆

と縦一七・一センチ、横二・四センチの極札が外題様に添付され、「琴山」の墨印が捺される。極札の裏書はなされていない。第三葉の表も空白になり、第三葉裏面より墨付となる。第二折十枚、第三折十枚、第四折も十枚あるべき処、九枚しかなく、綴じ糸が切れている。そして九枚目、すなわち第九葉及び第十二葉が、糸の切れた折剥離してしまい、紛失したものと考えられる。或は茶掛などに用いる目的で九枚目を切離そうとした際、糸も切れてしまったものかもしれない。

この脱落の一枚（二葉、四面）は国歌大観番号（旧編のもの）で539番歌本文より548番詞書まで、及び563番作者（詞書は559番からかかってくるのもともとな）から573番詞書まで、の部分である。これは秋下後半より冬の冒頭付近に該当し、晩秋から初冬にかけての山河を描く作が多い。想像を逞しくすれば、或は茶掛に用いるに相応しいと目されたかもしれない。

第五折十枚、第六折十枚。第七折は六枚で第六葉より五葉遊紙となる。第九葉はていねいに切り取られ、第十二葉は表紙と見返

しの間にはさみ込まれる。

下冊は、第一折十枚、内第一葉は上冊の場合同様表紙と見返しとの間にはさみ込まれ、第二葉も遊紙になる。従って第三葉から墨付となる。第二折十枚、第三折二枚、第四折八枚、第五折十枚、第六折十枚。第七折も十枚であるが、第二十葉が切り離されている。この切離された一葉は、続く第八折が二枚で、隠岐本跋書写のためのみにあてられており、その跋が本書では二面と四行分を使用されている点から、想像ではあるが、第七折の最終葉に隠岐本跋を書写し始めた処、書き切れないことを知って、筆者自身が切り捨てた、その痕跡とも解されなくはない。後掲のように隠岐本跋には他に比して他本との異同や誤脱が目についたりする。或は本文と跋文との間ではあるが、奥書が記されていたとも考えられなくはない。

第八折は前述の如く二枚で、最終葉は表紙と見返しの間にはさみ込まれる。

一面十一行、和歌一首一行書きで、詞書は三字下げ、作者名は上を揃えて約十二字分下げて書写されている。

上冊は「新古今和歌集序」として真名序、次いで一葉の遊紙のあと仮名序、「新古今和歌集巻第一」の順に書かれ、巻十までが書写される。奥書等はなし。下冊は巻十一より始まり巻二十本文のあとに、所謂隠岐本跋が付される。奥書等はない。撰者名注記、隠岐本合点、切出し歌に対する注記もない。

又、本書は二重に箱に入れられており、内箱は真塗りで、蓋には中央に「新古今集」と銀泥文字がある。内のが縦二三・七センチ、横一八・二センチ。外のは縦二四・五センチ、横一八・九センチ、高さ三・四センチである。身には底の中央に最大縦二・五センチ、横一・六センチの瓢箪形のくりぬきがあり、左上に

小堀権十郎殿新古今集箱書

と記された縦一三・二センチ、横二・二センチの極札が貼付されている。内のは縦二二・九センチ、横一七・三センチ。外のは縦二三・五センチ、横一七・九センチ、高さ三・二センチである。

外箱は桐で、蓋の中央部に

伏見殿邦高親王御筆

新古今集

と二行に打付書されており、蓋の外のは縦二七・五センチ、横二一・三センチ、高さ七・四センチ。身の内のは縦二六・三センチ、横一九・四センチである。

蔵書印は上下冊とも墨付第一丁の右下隅に「実践女子大学図書館印」の朱印、墨付最終丁左下隅に「常磐松文庫印／七九八九二」及び巻末遊紙最終丁左上に「45／教育研究」（横書）の印がある他には、旧蔵者を知る手がかりとなりそうな印も書付けも残されていない。外箱蓋裏に古書肆のラベルがあるのみである。

本書筆者は琴山の極札、及び外箱箱書に見られる通り、邦高親王であろう。邦高親王については、井上宗雄『中世歌壇史の研究室町前期』（昭和36年12月。同59年6月に改訂版が出されている。）に詳しいので参照されたい。康正二年（一四五六）生、享祿五年（一五三二）没。父式部卿貞常親王。父の没後文明六年（一四七四）に伏見宮四代を嗣ぎ、そのころより歌壇的活動を開始、文明期の有力歌人に数えられ、一歳年長の三条西実隆との交友も知られる。家集に「安養院御歌」「邦高親王集」「邦高親王御百首」などが知られ、伊達文庫蔵の私撰集「邦高集」の編者である可能性もあるという。

新古今和歌集については改めて書くまでもあるまい。その諸伝本は、集の成立事情に即応させて五系統に分類することが行なわれている。今簡略にそれを示すと

第一類……元久二年竟宴時の成立

第二類……切り継ぎ段階での成立

第三類……切り継ぎ完了時の成立

第四類……所謂「隠岐本」

第五類……その他

となる。伝本の大部分は第二類に属しているが、本書も又、第二類の切り継ぎ時代に成立した本の流れを汲むと解される。

久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注『新古今和歌集』（『日本古典文学大系』昭和33年2月）が「異本所載歌」として整理する35首の内、本書は17首を本文中に持っている。その数は比較的多い方である。

以下に、国歌大観番号（旧編のもの）と共に示す。

(1) 太神宮に百首歌たてまつりし中に

いかにせむ世にふるながめしはの戸にうつろふ花の春の暮がた

（巻二、146の次）

(2) （詞書欠。作者からみて前歌の「延喜十三年亭子院歌合歌」がかかるとは思われぬ。） 山辺赤人

恋しくは形見にせんと我宿にうへし藤波今さかり也

（巻二、162の次）

(3) (郭公の心をよみ侍ける)

郭公昔をかけて忍べとや老のね覚にひと声ぞする

(4) 題しらず

五月雨の空だにすめる月影に涙の雨ははるゝまもなし

(5) 太神宮にたてまつりし秋歌の中に

朝露の岡のかや原山風にみだれて物は秋ぞかなしき

(6) 宇治前関白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍けるに

契けむ程はしらねど七夕のたえせぬけふの天の河かぜ

(7) (題しらず)

高砂の尾上にたてる鹿の音にことの外にもぬるゝ袖哉

(8) 題しらず

誰なりとをくれさきだつ程あらば形見に忍べ水くきの跡

(9) 醍醐の御門かくれ給ての比、人のもとにつかはしける

世中のはかなきことをみる比はねなくに夢の心ちこそすれ

(10) 延喜御時屏風歌

波の上にはのにみえつゝゆく舟はうら吹風の上るべなりけり

(11) 除目のゝち雁のなきけるをきゝてよめる

都にて春をだにやはすぐしえぬいづちか雁のなきてゆく覧

(12) 題しらず

幾世へしいそべの松ぞ昔より立よる波や数は知らん

(13) 太神宮歌合に

大空にちぎる思ひの年もへぬ月日もうけよゆく末の空

(14) 題しらず

顯昭法師

(卷三、212の次)

赤染衛門

(卷三、237の次)

太上天皇

(卷四、298の次)

(作者名欠)

(卷四、314の次)

惠慶法師

(卷五、441の次)

和泉式部

(卷八、812の次)

盛明親王

(卷八、814の次)

躬恒

(卷十、904の次)

躬恒

(卷十六、1474の次)

貫之

(卷十七、1603の次)

太上天皇

(卷十八、1783の次)

能宣朝臣

水くきの跡に残れるたまのこゑいとゞもさむき秋の風哉

(卷十八、1801)

(15) 題しらず

西行法師

ねがはくは花のもとにて春しなむそのきさらぎの望月の比

(卷十八、1845の次)

(16) 奉^{マツル}弊使にて住吉にまいりて、昔住ける所の荒たりけるを見てよみ侍ける

津守有基

住吉と思ひし宿はあれにけり神のしるしを待とせしまに

(卷十九、1914)

(17) 依釈迦遺教念弥陀といふこゝろを

肥後

をしへ置て入にし月のなかりせば西に心をいかでかけまし

(卷二十、1975の次)

この内、若干問題のあるのは(6)として掲出した「契けむ……」の歌である。

本書はこの歌の作者を欠いている。前歌の「赤人」がかかることはありえない。そして次の「権大納言長家」の歌年をへて住べき宿の池水は星合の影もおもなれやせん

に詞書が付されないため、当該歌の「宇治前関白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍けるに」がかかる形をとっている。

これを他伝本と比較してみると、例えば鳥丸本(天理図書館善本叢書)による)では、「契けむ……」の歌の作者を「宇治前関白太政大臣」とし、公夏本(久保田淳著『新古今和歌集全評釈』による)では、やはり「宇治前関白太政大臣」の作者名を持つが、詞書は「家に七夕の心をよみ侍けるに」となり、次の長家歌で改めて「宇治前関白太政大臣家にて、七夕の心をよみ侍ける」と詞書している。

この「契けむ……」「年をへて……」両首の歌順は逆転する伝本もいくつか見られて、例えば東京大学国文研究室本(久保田淳編『新古今和歌集——改訂版——』桜楓社刊、による)では「年をへて……」歌に詞書「宇治前関白太政大臣家に、七夕の心をよみ侍けるに」作者「権大納言長家」、続く「契けむ……」歌には作者「宇治前関白太政大臣」のみ付されて、詞書がかかる形を採っている。

いずれが本来の形であったのか定かではないが、少なくとも本書は脱落を生じていることにはなっており、その原因は詞書に「宇治前関白太政大臣」の名を掲げた処に求められるであろう。

但、その脱落は本書の書写時点での不注意に生じたものではない。この歌の上に、本文と同筆の付箋があり、そこに次のように注記されているからである。

このさくしや、こなたのほんおぼつかなき事候程に、わざとまづかき候はず候、そなたにてよきほんに御らんじあはせ候てあそばし候べく候、こなたにてもべちのほんにて見いだし候ば、かさねて申候べく候

この付箋同筆であるが、本書書写時点で加えられた注記か、親本に既にあるかはその忠実な転写なのかは確定できない。おそらくは前者であろう。付箋の記入者にとつての親本（「こなたのほん」）は、この歌の作者名に関して「おぼつきなき事」が存在した。そのために「わざとまづかき候はず候」というのであろう。作者名を欠いている（というより、欠落させることにした）理由をこのように説明する以上は、「こなたのほん」には作者名が、おそらくは鳥丸本に見られたように「宇治前関白太政大臣」とでもあったのであろう。

付箋はそうした事情を心覚えとしてではなく、贈呈を前提として注記している。他本校合による本文校訂を他日に、というより相手に委ねている。下冊巻十九には

延喜六年日本（紀竟宴に、神日本磐余彦天皇）

大江千古

白浪に玉より姫のこしことはなぎさやつゐにとまり成けん

（巻十九、1865）

及び

玉依姫

三統理平

とびかけるあまの岩舟尋てぞ秋津島には（宮はじめける）

（巻十九、1867）

の二個所に及ぶ空白個所がある。空白部分を（ ）に入れて右には掲出したが、後日補なうこともできるよう配慮された空白であり、もし、上冊巻四の付箋より知られる姿勢が終始貫かれていたのなら、ここにも何らかの注記があつてしかるべきであろう。或は下冊第七折最終葉の切り取られていることと無縁ではないかもしれない。ともあれ、本書は書写に際し、親本以外は用いていないようである。又、本書には数個所異本校合の跡が認められるが、以上よりすると、その校合は親本に書入れられていたものを転写したにすぎない可能性が高くなる。

本書が諸伝本間に占める位置を見定める手段としては、奥書などを持たないため、歌の出入りと本文異同とに頼ることになる。歌の出入りで最も著しいのは、先に一覽した切出し歌である。前掲「日本古典文学大系」の「異本所載歌」の項、及び後藤重郎『新古今和歌集の基礎的研究』（昭和43年3月）の「異本所収歌一覽表」の項を参照して、本書との異同を検するに、最も近いと思われるものは、名古屋大学国文学研究室蔵本（二八二七五八）である。後藤氏著書では「名国1」の略称が与えられているが、本

稿では他と紛れる可能性はないので、仮に名大本と称ぶことにする。この名大本は巻十までの零本ではあるが、伝存部分に9首の「異本所収歌」を有し、その全てが本書に一致する。ただ、本書が有する(5)の「朝露の……」の歌は後藤氏著書によれば名大本に見えないことになるが、どうやら後藤氏前掲書(P 三四)に誤植があるようで、巻十までは名大本と本書とは全ての歌が一致する。その名大本は、後藤重郎氏及び名古屋大学国文学研究室的御厚意により調査を行なった処、本書の転写本と判明した。以下に理由を述べておく。

名大本も本書同様、七折であるが、第七折の八枚(但、最後の一葉が切り取られて98番歌本文以下、一面分を欠く)は料紙が異なり、第六折の巻八までは行の配りや字母に至るまで本書と殆ど一致していたのであるが、本書が巻八巻末歌以下九行分を余白とし、巻九より改面するのに対し、名大本は四行分程空けてすぐその面に巻九を続けている。そして、第七折の第二面は13行、第三面は14行に書写して、都合一面分の節約を果している。

又、本文異同に關しても、

(1)真名序——先抽万葉之内集イ(本書)——先抽万葉集之内(名大本)

(2)232第五句——五月の空——五月雨の空

(3)385第五句——夜の夜の月——秋の夜の月

(4)658詞書——基俊がもとへ——基俊もとへ

(5)787詞書——身まかりにける^を——身まかりにけるを

が主なものだが、(1)(4)(5)のように、本書が書入れを忠実に書写しているのに対し、名大本はその結果生じる完成本文のみを持ち、(2)(3)のような本書に誤写誤脱が想定できる箇所でも正しい本文のみ持つ。(4)は後述のように諸本は「基俊がもとへ」但、932詞書「十五首」(諸本「五十首」が正しい)のようなものは誤りと気づかなかったようである。

以上よりすれば、本書と名大本との関係は親子とも姉妹とも決しかねるようではあるが、前に触れた「契けむ……」の歌の作者名を、名大本はやはり欠き、しかも本書のようにには付箋を持たないことから、様々な可能性の内、本書を転写して名大本が成った、と見るのが最も妥当と思われる。名大本の書写姿勢からすれば、その親本に作者名があれば書かないはずはなく、付箋があっても(なくても)書かないであろうから、本書と親本を共有するとは考え難く、且、本書を親本とすることに矛盾は生じない。

因みに本書の一枚の欠落した本文は、名大本により補なうことが可能である。

さて、本書との間に「異本所収歌」共有歌数を9首、又は8首をもつ伝本に、烏丸本（天理図書館蔵。書陵部蔵烏丸光栄書写本も同じ）、久曾神昇氏蔵御室本（「御室本」と略称する）、武田祐吉氏旧蔵大夫阿闍梨田嘉本（「大夫本」と略称する）、後藤重郎氏蔵大炊御門信量奥書本（「信量本」と略称する）等がある。これらは皆、前掲(6)の「契けむ……」の歌の位置を本書と同じくする。

但、烏丸本・御室本・大夫本・信量本のいずれもが、本書の持たない

（題しらず）

ふる里に花は散つゝみ吉野の山のさくらはまだ盛なり

（巻二、110の次）

を持ち、代わりに(2)の「恋しくは……」歌は持たない。烏丸本は(11)～(17)を持たず

（だいしらず）

ほとゝぎす花たち花のかばかりになくやむかしの名残成らん

（巻三、244の次）

を持っている。この歌は信量本にも見える。その信量本は本書の持たない歌を前掲兩首を含めて5首持ち、逆に本書の持つ(1)(2)(8)(9)(10)(12)(13)(16)の8首を持たない。すなわち「異本所収歌」の本書との共有数こそ9首にのぼるものの、13首の出入りを見ることになるのである。などなど同様の数え方を施していくと、前掲諸伝本は本書に対し、

	異本所収歌数	異本所収歌共有数	出入り歌数
（名大本）	10（10）	10（10）	0（0）
烏丸本	11（11）	9（9）	10（3）
御室本	10（4）	9（3）	9（8）
大夫本	9（7）	8（6）	10（5）
信量本	14（8）	9（5）	13（5）

と表示しうる共有と異同を有することが知られる。（ ）の内に入れたのは巻十までの数値である。但、御室本は巻末に一括されているものを便宜上省いた。

一応の目安として、上冊は烏丸本に（9首一致、3首の出入り）、下冊は御室本に（6首一致、1首のみの出入り）近いといえるだろう。

但、歌順異同で諸伝本間に最も揺れの大きい部分とされる

元暦元年大嘗会主基歌、青羽山

式部大輔光範

立よれば涼しかりけり水鳥の青羽の山の松の夕かぜ

（巻七、755）

同大嘗会主基方稻春歌、丹波国長田村をよめる

権中納言兼光

神代よりけふのためとややつかはになが田のいねのしなひそめけん

（巻七、754）

の歌順、及び詞書が本書（右掲の通り）に一致するのは、前掲諸本の内では、大夫本・信量本に限られる。

以上、本書を従来紹介された新古今和歌集諸伝本の中に位置づけてみた。

次に、主要な本文異同を列挙しておく。掲出にあたっては、主に久保田淳『新古今和歌集全評釈』の「校異」を参照し、本書に異文が注記されるものはその全てを掲げたが、他は重要と思われるものに限った。異同箇所、本書の本文、（ ）内に本書と同一の本文を持つ諸本の略称、他本の本文、（ ）内にその本文を持つ諸本の略称の順に記した。諸本略称は以下の通り。公夏本→キ。烏丸本→カ。伝為氏本→氏。尊経閣本→ソ。小宮本→コ。柳瀬本→ヤ。鷹司本→司。東大本→ト。慶祐本→ケ。大夫本→大。伝親元本→チ。諸本の過半が一致する場合→諸。

真名序——先抽万葉集之内——先抽万葉集之内（諸）。

7 第五句——みちもとむなり（ヤチ）——もとむらん（キカ氏ソコト大）もとむ也（ケ司）

58 初句——こぬ人に（コ）——見ぬ人に（諸）

49 第五句——袖かふれけん（チ）——ふれつる（諸）ふれける（キ）

116 第五句——花や散らん——花ぞちりける（諸）

139 第四句——たえてつねなき（氏ソ司チ）——たえてつねなき（キカコケ大）つねなき（ヤ）つねなき（ト）

162 第三句——さきにけり——ちりにけり（諸）散りにけり（ト）

166 第四句——をのが時とぞ——おのが比とぞ（諸）

204 第五句——まつぞわびしき——待ちぞわびにし（諸）まちぞわびにし（ト）まちぞわびまし（チ）

208 第二句——思ひもあへぬ——思ひぞあへぬ（諸）

224 第四句——袂にかゝる——袂にあまる（諸）

228 初句——三島江や——三島江の（諸）

232 第五句——五月の空——五月雨の空（諸）五月雨のころ（ト）

272 詞書——とびのぼるをみて（カ氏ソチ）——とびけるを（キケ大）とびわたるをみて（コ）とびのぼるを見て（ト）とびたるをみて（司）のぼるをみて（ヤ）

272 第五句——草の枕を——草のまくらに（諸）草のまくらに（ヤ）

283 第四句——いづれかさきに（キチ）——いづれかまづは（諸）

314 第二句——降くる雨は（キ司ケ大チ）——ふりつる雨は（氏ソコヤ）ふりつる雨は（カト）

334 第二句——朝たつをの——朝たつへの（諸）朝たつ野への（ト）

349 第三句——ほに出ば（氏）——ほに出て（キソヤ司ケ大）ほにいで（カコチ）ほにいで（ト）

385 第五句——夜の夜の月——秋の夜の月（諸）

392 作者——家隆朝臣（ソコ）——藤原家隆朝臣（キ氏司トケ大）藤原家隆（チ）「藤原」補入（カ）「藤原」ミセケチ（ヤ）

427 詞書——田家月を（カ氏コヤ）——田家月といふ事を（キ司トケ大チ）田家月（ソ）

433 第五句——月哉（カ氏ソコ）——月影（キケ大チ）月影（トヤ）月かな（司）

435 詞書——心をよめる（カ氏ソコ）——心を（諸）「よめる」朱（ヤ）

437 第四五句——鹿のひとり——ひとり鹿の（諸）

458 第二句——雁の翅に（カ氏司）——雁のは風に（諸）雁のつばさに（ト）

477 第二句——み山の庵の（ヤチ）——ね山のいほの（諸）「ね」ミセケチ→みやま（司）深山（ト）

502 第五句——したふ也（司）——したふなる（諸）したふなる（ト）したふなり（ヤ）

535 第四句——夜なく虫の（キ氏ヤ）——よなくむしは（諸）虫は（ト）

536 詞書——よませ侍けるに（キ）——よみ侍けるに（諸）

586 初句——晴くもる——はれくもり（諸）

- 594 作者——右衛門督通光——右衛門督通具（諸）左衛門督通具（司）
- 630 第四句——櫛のした葉も——まきの下ばに（諸）下葉も（ヤ）
藤原イ
- 652 作者——雅經（ソコ）——藤原雅經（諸）藤原イ。雅經（カ）
- 658 詞書——基俊がもとへ——基俊がもとへ（諸）
- 662 初句——かたしきの（チ）——さむしろの（諸）さむしろや（大）さむしろの（ト）
かたしきイ
- 664 第三句——ながむれど（カ氏ソケ）——ながむれば（キコ司大チ）ながむれば（ヤ）ながむれど（ト）
どイ
- 671 作者——定家朝臣（ソヤ）——藤原定家朝臣（諸）二本無性定家朝臣（カ）藤原定家（チ）
- 673 作者——有家朝臣（ソコヤ）——藤原有家朝臣（諸）藤原。有家朝臣（カ）
- 689 第五句——世にも有哉（カ氏コヤ司チ）——世にもふるかな（キソケ大）有哉（ト）
ふるイ
- 690 第四句——煙もさむし（キカソ）——けぶりもさびし（諸）
- 704 作者——有家朝臣（カソコ）——藤原有家朝臣（諸）
- 713 作者——土御門右大臣師房——土御門右大臣（諸）土御門左大臣（キ）
- 730 詞書——承暦四年——承暦二年（諸）
- 730 第三句——わたらへや——わたらひや（諸）
- 739 作者——定家朝臣（カソコ）——藤原定家朝臣（諸）「藤原」ミセケチ（ヤ）
- 742 第三句——つゝむ覽（カ氏ソコ司チ）——あまるらん（キケ大）つゝむらん（ヤト）
あまるイ
- 743 詞書——入道前太政大臣——入道前関白太政大臣（諸）
- 751 詞書——悠紀（氏ソ司ト）——悠紀方（キカコケ大チ）「方」ミセケチ（ヤ）
- 753 詞書——悠紀（氏ソコ）——悠紀方（諸）「方」ミセケチ（カ）
- 763 詞書——さきたる——花さきたる（諸）花のさきたる（ト）花のさきける（氏）
- 786 詞書——申つかはしける（カヤチ）——つかはしける（諸）
- 787 詞書——身まかりにける。を——身まかりにけるを（諸）
- 同——さがの辺に（氏ソコチ）——さがのほとりに（キケ大）嵯峨野のほとりに（ヤ）さが野のほどに（司）さがのゝ辺に（カ）

ト)

797 作者——久我太政大臣雅美——久我太政大臣(諸)

799 詞書——又の年の月を見て——又のとし月を見て(諸)又の年の秋月を見て(キ)

803 第三句——しぐる覧(カチ)——しほらん(諸)しぐるらん(ヤ)

805 第四句——ながき形見と(キカコ大チ)——ながきかたみに(氏ソ司トケ)かたみと(ヤ)

806 詞書——斎宮女御のもとに(司)——斎宮女御のもとにて(諸)

806 初句——尋つゝ——尋ねても(諸)尋ても(ト)尋での(ヤ)

808 第二句——心のやみに(司)——衣のやみに(諸)衣のやみに(ヤ)

812 作者——女御藤原生子大二条関白女(コチ)——女御藤原生子(諸)女御藤原生子大二条関白女(ヤ)

813 詞書——おさなき——をさなかりける(諸)

820 詞書——見侍て(カ氏ソコヤ司)——見て(キトケ大チ)

844 詞書——身まかりにける(カ氏ソヤ司チ)——身まかりける(キケ大チ)身まかりぬる(ト)みかりにける(コ)

849 詞書——みかどを(カ氏ソコヤ司チ)——御かど(キケ大)みかど(ト)

854 作者——藤原季綱(カ氏司)——藤原季綱(キソコケチ)藤原季綱(ヤ)藤原季綱朝臣(ト)藤原秀繩(大)

862 詞書——関のちかき(カソ)——関ちかき(諸)

863 第四句——たつ日もしらず——たつ日をしらず(諸)たつ日も(ヤ)

869 作者——一条右大臣恒佐(カ氏ソケ大)——一条左大臣(キ司ト)一条左大臣恒佐(コチ)一条左大臣恒佐(ヤ)

876 詞書——七月計(カ氏ソコヤ司チ)——七月ばかりに(キトケ大)

886 詞書——人々にわかれおしみて——人々わかれおしみければ(キケ大)人々わかれをしみて(氏ソコヤトチ)人々わかれをし

みて(カ司)

886 第三句——なぐさまむ——なぐさむと(諸)

899 第四句——明石のとまり——明石のとより(諸)あかしのとまり(ヤ)

900 第三句——みだるめり(チ)——みだるなり(諸)みだるなり(ト)「な」ミセケチ→「み」(司)

- 901 第五句——西にぞ有らし——西にあるらし(諸) 西にあるらし(ト)
- 915 詞書——いつ程にか帰るべきと(氏コチ)——いつほどに帰るべきと(キ司トケ大) 一つのほどにか帰べきと(カ) 一つほどにかゝへるべき(ソ) ひとつごろにか帰べきと(ヤ)
- 932 詞書——十五首——五十首(諸)
- 937 第五句——すまゐ成けり(ヤ大)——すさびなりけり(諸) 「み」ミセケチ→「さ」(司)
- 943 詞書——よみ侍し(カ氏ソコチ)——よみ侍ける(キトケ大) よみ侍し(ヤ) 読み侍りしに(司)
- 952 詞書——ことを(司)——ことをよめる(諸)
- 954 第四句——忘れぬ人を(カコヤ司チ)——わすれぬ人を(キ氏ソケ大) 忘れぬ人を(ト)
- 957 第三句——形見にて(氏コヤ司大)——形みとて(キカソトチ) かたみにて(ケ)
- 976 詞書——よみ侍ける(氏司チ)——よみけるに(キケ大) よみ侍けるに(カソコ) よみ侍ける(ト) よみ侍ける中に(ヤ)
- 981 第五句——もる人はなし——もる人もなし(諸)
- 985 詞書——たてまつりし(氏コチ)——たてまつりし時(キカ司ケ大) たてまつりし。時(ソ) たてまつりしに(ヤト)
- 1006 第五句——尋ねけるやと(大)——尋ねけりやと(諸) たづねけりやと(司)
- 1023 詞書——返事(カ氏ソコヤチ)——返し(キトケ大) 返り事を(司)
- 1045 作者——法性寺入道前関白太政大臣——法成寺入道前摂政太政大臣(諸) 法性寺入道前摂政太政大臣(ヤ) 法性寺入道前摂政太政大臣(司) 法成寺入道摂政太政大臣(カ)
- 1053 第五句——影をみてまし(キ)——影をみせまし(諸)
- 1078 詞書——いふ心を——いへる心を(諸) いへることを(ヤ)
- 1086 第三句——谷の水——谷水の(諸) 苔水の(ヤ)
- 1094 作者——雅経(ソコヤ)——藤原雅経(諸) 藤原雅経(カ)
- 1106 初句——ながめわびぬ——ながめわび(諸)
- 1107 詞書——雨ふり侍ける——雨ふる(諸) あめのふる(コチ) 雨ふる(ヤ) 雨ふりける(ト) 雨ふりたる(司)

- 1111 詞書——忍恋のこゝろを(キケ大)——忍恋(カ氏司ト)しのぶるこひ(コ)忍ぶる恋(ヤ)しのぶこひ(ソチ)
 1114 詞書——たてまつりし(氏)——たてまつりける(諸)
 1115 作者——藤原元輔朝臣——藤原基輔朝臣(諸)
 1150 詞書——まかりて——まかりて歸りて(諸)まかりて(ヤ)
 1152 第三句——思ひしに——思ひしを(諸)
 1172 第五句——心まどひに(カ氏ソ司大チ)——心まよひに(キトケ)こゝろまどひに(ヤ)
 1176 詞書——よみける(氏ソコチ)——よみ侍ける(キカケ大)よめる(司ト)「侍」ミセケチ→よみける(ヤ)
 1178 詞書——歸り侍にける(ソコヤ)——歸侍ける(キ氏司トケ大)かへり侍にける(カ)歸侍けるに(チ)
 1180 作者——九条入道前右大臣——九条入道右大臣(諸)九条入道左大臣(ヤ)九条右大臣(ト)
 1181 詞書——小一条の——小八条の(諸)一条の(カ)
 1181 第三句——露けさは——露けきは(諸)
 1207 第五句——恋つゝぞぬる——恋つゝぞふる(諸)
 1208 第二句——山下風吹て——山おろし吹て(諸)
 1215 第五句——君しとはずは^{カイ}——君しとかずは(諸)君しとはずは(ソ)
 1273 第五句——影はみえねど(キ氏司ケ大チ)——影はみねども(カソコヤミ)
 1284 第五句——やどる月かげ——のこる月影(諸)
 1332 作者——藤原定家朝臣(氏チ)——定家朝臣(諸)
 1333 詞書——関路恋を——ナシ(諸)
 1334 詞書——寄雨恋を——ナシ(諸)
 1335 詞書——冬恋を——ナシ(諸)
 1336 詞書——寄風恋を——ナシ(諸)
 1339 第五句——哀ともみむ(キケ大)——あはれとは見む(諸)

1341 詞書——よみ侍ける時(氏ソコ)——よみ侍けるに(諸)よみ侍けるに(ヤ)^{時(朱)}

1342 第五句——袖の上の露(キ)——袖のうは露(諸)

1346 初句——うちはへて^{とけイ}——うちはへて(諸)

1351 イ作者——源重之(氏チ)——重之(諸)「源」ミセケチ(ヤ)

1357 第四句——もろこし舟も(キケ)——もろこし舟の(諸)

1363 第四句——つらきかたには——つらきがためは(諸)つらき人には(カ)

1373 第四句——忘れず思ふ(カ司)——忘れず思ふ(キソケ)忘れずおもへ(氏コト大チ)わすれず思ふ^{ヘイ}(ヤ)

1381 第二句——夢にありつと(氏ソコ)——夢にあひつと(キカヤ司ケ大)夢にあふつと(ト)夢にありつと(チ)

1396 詞書——わたるなど(キカコケ大)——わたると(氏ソヤ司トチ)

1406 第二句——思ひなはてそ(氏)——思ひなたえそ(諸)

1443 詞書——朱雀院御時——朱雀院(諸)朱雀(カ)

同——あくる年の(キカ氏ケ大)——あくるとし(ソコヤ司トチ)

1455 作者——藤原雅経(ソ司)——藤原雅経朝臣(キ氏コトケ大チ)^{藤原(朱) 二字無之(朱)}雅経朝臣(カ)「朝臣」朱補(ヤ)

1456 詞書——さかりになりける——さかりなりける(諸)

1461 詞書——^{感イ}翫新成桜花——翫新成桜花(諸)

1474 第四句——松のひまもる——松のくまもる(諸)松の木まもる(ケ)

1487 詞書——たてまつりて侍けるを(カ氏ソコヤチ)——たてまつりけるを(キケ大)奉り侍けるを(ト)たてまつりたりけるを(司)

1488 第三句——ことゝへど(キ氏ソコケ大)——ことゝへば(ヤトチ)ことゝへば^{どイ}(カ)「は」朱ミセケチ→「と」(司)

1495 第三句——秋風に(カ氏ソコトチ)——秋風は(キヤケ大)秋風に^{ハイ}(司)

1495 第五句——涼しからなむ(氏ソコ大チ)——涼しかるらん^{ヤ(朱)}(キカヤトケ)すゝしかりけり(司)

1499 作者——藤原為時朝臣(カ司)——藤原為時(諸)

- 1513 第五句——心からかも（カ氏ソコ司）——所がらかも（キヤトケ大チ）
 1516 第三句——山風に（カ氏ソコヤ司大）——山のはに（キト）山風に（チ）山のかぜに（ケ）
 1529 詞書——九月十日あまり（カ司）——九月十余日（氏ソコヤトチ）九月十余日（キケ大）
 1533 第四句——われ身は——われみば（キカソコケ大）わがみは（氏）「か身」朱ミセケチ→われみば（司）我見ば（ヤトチ）
 1534 第二句——我世の影を（キ大）——わが身のかげを（諸）わが身のかげ（コ）
 1540 初句——身のうさに（キカ司ケ大）——身のうさを（氏ソコト）身のうさを（ヤ）身のうさを（チ）
 1543 詞書——をくりける（キ司）——おくれりける（諸）
 1548 第五句——深ぬらん（キ司ケ大）——ふけにけむ（カ氏ソコトチ）深にけん（ヤ）
 1550 詞書——遍照寺（氏ソ司）——遍照寺の（キケ大チ）遍照寺に（カコ）遍照寺にて（ヤト）
 1551 詞書——その人。——其人（諸）その人は（コ）
 1554 第二句——月の出しほ——月の出しほの（キトケ大）月のいでしほの（氏ソコチ）月のでしほの（カ司）「い」ミセケチ（ヤ）
 1564 詞書——ナシ——題しらず（諸）
 1565 詞書——法成寺入道前撰政太政大臣——法成寺入道前太政大臣（諸）法成寺入道前関白太政大臣（キ）法成寺入道前太政大臣（性イ）
 （ヤ）
 1583 第四句——おりを忘れぬ——折をわすれぬ（諸）
 1591 作者——紀貫之（チ）——貫之（諸）
 1592 作者——王生忠峯（チ）——忠岑（諸）
 1594 第四句——芦のうれはに——芦の枯はに（諸）
 1598 第五句——宿をかりつる（ケ）——宿をかりける（諸）宿をかりつる（ヤ）
 1624 詞書——おろして侍にけるに——おろし侍にけるに（キカソヤケ大チ）おろし侍けるに（氏コ司ト）
 1646 初句——かゝる世も（ケ）——かゝる世も（諸）
 1652 第四句——跡なき道を——あとなき水を（諸）あとなき水を（ヤ）
 波イ

- 1680 詞書——ナシ(氏ソコ司トチ)——題しらず(キカケ大) 朱補(ヤ)
- 1680 第二句——昔住こし——昔すみけん(諸)
- 1681 初句——陰よとて——陰にとて(諸)
- 1683 第五句——苔のいし橋(カ氏ソコ司)——こけの岩橋(キトケ大チ) こけの石はし(ヤ)
- 1690 第四句——西の浦にも——西のうらにも(諸) 西の空にも(キトケ) 西の浦にも(ヤ)
- 1701 第三句——世をすくす(氏)——世をつくす(諸) 世をつくす(ソ) 世をすくす(ケ)
- 1709 初句——なれて見し——なれて見てし(諸) なれきてし(氏)
- 1710 詞書——出家のゝち——出家の時(諸)
- 1720 詞書——よみける(ソコヤチ)——よみ侍ける(キカ氏トケ大) よめる(司)
- 1727 詞書——忠峯が歌など——忠岑がなど(諸)
- 1732 詞書——又の日つかはしける(コ)——又の日(諸)
- 1732 作者——右大将濟時(キ)——左大将濟時(諸)
- 1745 第五句——我も成なむ——我もなるらむ(諸)
- 1762 第二句——涙に月は——涙に月も(諸)
- 1769 第四句——夢をうつと——夢をうつに(諸)
- 1773 詞書——入道前関白太政大臣家——入道前関白家(諸)
- 1782 詞書——返しに(キケ大)——返事に(諸) 返ごとに(ト)
- 1782 作者——八条院高倉(カヤト)——ナシ(諸) 前歌ノ前大僧正 慈円ガカカル
- 1784 詞書——前大僧都全真(キ氏)——前僧都全真(諸)
- 1792 第二句——さびしくぞ世を——久しくぞ世を(諸) ひさしくよにぞ(カ)
- 1802 第五句——つもりぬる哉——つもるころかな(諸)
- 1811 第五句——物もこそ思へ(コ)——ものをこそ思へ(諸) 物をもこそ思へ(ヤ)

- 1821 第二句——すごくふけども(カソヤ)——すごくふくとも(諸)すごく吹とも(チ)
- 1830 第三句——世をすてゝ——世をも捨て(諸)よを捨て(司)も(朱)
- 1831 初句——なにゆへに——なにごとに(諸)
- 1833 第三句——人もあらば(氏ソコヤ司チ)——人あらば(キトケ大)人のあらば(カ)
- 1837 第三句——こりつめる(キ司)——こりつむる(諸)
- 1844 詞書——寂蓮法師(氏)——寂蓮(諸)
- 1844 詞書——俊成に——三位俊成に(諸)三位入道俊成に(氏)三位俊成(司)
- 1845 第四句——昔をこふる——昔をおもふ(諸)
- 1846 詞書——たてまつりけるに(チ)——たてまつりける(諸)たてまつりける時(カ)
- 1846 作者——皇太后宮大夫俊成——ナシ(諸)前歌ノ皇太后宮大夫俊成ガカカル
- 1850 初句——秋風の——秋風に(諸)
- 1866 詞書——稲田彦——猿田彦(諸)
- 1873 詞書——申をくり侍ける(司)——申をくりける(諸)申(朱)をくりける(ヤ)
- 1879 詞書——月よみのもりに(ソ)——月読社に(諸)
- 1882 詞書——入道前関白右大臣家——入道前関白家(諸)
- 1886 詞書——よめる(キ司ケ大)——よみ侍ける(諸)
- 1887 詞書——さか木の枝に——榊に(諸)
- 1892 詞書——かけゝるを(カ)——かけゝるに(諸)
- 1909 詞書——熊野へ(キ)——熊野に(諸)熊野(氏)
- 1909 作者——徳大寺左大臣実能——徳大寺左大臣(諸)後徳大寺左大臣(卜大)
- 1920 詞書——みつの寺(キヤケ大)——みつてら(諸)
- 1936 第五句——風にまかせて(氏)——風にながめて(諸)風にまかせて(司)ナカメイ

1943 第四句——山のおくにも——やどるおくにも（諸）

1949 初句——さらずとも——さらずとて（諸）

1960 第二句——君がり出る（ケ）——君がりいつか（諸）君がりいつ（ト）

1976 詞書——あかゝりける夜——あかゝりけるに（諸）

1978 詞書——身まかりてのち——身まかりにける後（諸）

隠岐本跋——いにしへ（ヤコ）——いにし（諸）故（カ）

同——和歌の——和歌所の（諸）

同——やはらかなりし——風やはらかなりし（諸）

同——集撰する——集を抄する（諸）

同——しかるにあらず——しかるをこれを抄せしめばもとの序をかよはしめべきにあらず（諸）

↓本書ノ一行
分ノ目移リカ

同——さまぐくの——巻々の（諸）さきぐくの（カ）

同——千歌もゝち——千歌むもゝち（諸）

以上、異同の親疎に偏向は認められないようであるが、すなわち諸本の存在を群雄割拠に喩えるならその一員でもありうることで、今後の研究の進展に一つの資料を提供することにはなるであろう。

猶、本書の独自異文として注目すべきものとして、巻十四恋四巻末から巻十五恋五巻頭にかけて連続入集する「水無瀬恋十五首歌合」の6首に対し、歌題を書き添えていることが掲げられる。但、最初の4首（1333～1336）については問題がないが、残る2首には題が書かれず、1336の題がかかる形になっている。両首とも「こがらしの風」「萩の上かぜ」と風を詠み入れて1336の「寄風恋」題でも通用しそうではあるが、実際には「秋恋」のため、誤りを冒したことになる。従って原本の段階から題が存在した可能性は低くなるが、不徹底ながらも、書写時点で他書を参看しつつ本文に手を入れていく一例ではある。

新古今和歌集卷第一

春上

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

橘歌

口絵1 「新古今和歌集」巻一春上 冒頭

大氣三位

橘歌

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

見ゆりてはあはれと見ゆりては

春上のあはれと見ゆりては

口絵2 「新古今和歌集」付箋貼付部分